

炭素新素材開発を手掛けるまで、いろんな事業をしてきた。

「独立したのは二十五歳。最初始めたマネキン加工の関係から樹脂加工に携わってきたが、ひよんなことから常温転写という技術が生まれた。紙やフィルムに印刷された図柄を他のものに写し取る転写は、熱を加えないとできないといわれた。十一年前、絵画が印刷されたビニールフィルムをいつものようにパネルに張り付けた後で、フィルムの位置がズレてしまった。この失敗がヒントになって、施工がたやすく、短い時間でできる常温転写技術の開発につながった」

「転写した樹脂製のフィルムシートは耐用年数が来れば処理しなければならぬ。樹脂はそのままでは公

(炭素新素材開発)

大木工芸



大木武彦社長

害の心配があるが、炭化させればと思いついた。そこから吸着材の技術開発が始まる。細かい穴が多数開いている多孔質の炭は物質を吸着する性質を持つ。樹脂



炭で有毒物質を吸着

間に穴をつぶさずに加工した竹炭を入れて吸着力を高め、好評だ」

土鉱物物質を混ぜることで、炭の特性を失わないで有効利用できる。この方法で有害化学物質のホルムアルデヒドなどを吸着する『シックハウス症候群』対策用の装飾タイルを開発した。これを湖沼の護岸プロジェクトに使えば汚水を浄化、微生物も吸着できると考え、滋賀県と共同研究して

など廃棄物を炭化、固形化すれば、有毒物質や悪臭を吸着できるという発想だ」

「炭という点、普通は脱臭剤か燃料ぐらいしか利用法が思い浮かばないが、無限の可能性を秘めている。

「ダイオキシンやPCBといった有害物を分解するキノコを事業化したのもその流れ。キノコ類が環境ホルモンや農薬などを分解することは知られていた。栽培には土壌条件に限られるため実用化は難しい。ところが、岡山県の山村で生まれ育ち、炭とキノコは相性

「育つのが早く量も多くコストが安い。木炭より多孔質がある竹炭を使用した油取り紙など炭関連用品は約二百種類に及ぶ。例えば油取り紙は和紙とパルプの

新しい事業展開に。

いる」

「炭という点、普通は脱臭剤か燃料ぐらいしか利用法が思い浮かばないが、無限の可能性を秘めている。

「ダイオキシンやPCBといった有害物を分解するキノコを事業化したのもその流れ。キノコ類が環境ホルモンや農薬などを分解することは知られていた。栽培には土壌条件に限られるため実用化は難しい。ところが、岡山県の山村で生まれ育ち、炭とキノコは相性

いいのを経験から知っていたから、炭にキノコを植え付ければと考えた。竹炭粉末を石こうで直径一二センチの球体に固めた培地に植え付けたシメジ菌で、地中のダイオキシンなどの有害物を分解する。コンデンサーの中に含まれるPCBについて、四月から大手企業と回収・処理の事業を本格的に進める」

湖沼浄化で滋賀県と共同研究

〈会社概要〉もうけより新しいアイデアを生み出すのが生きがいという大木武彦社長(56)が、友人ら3人と1970年創業。会社設立は97年。常温転写技術を手始めに30を超す特許を持ち、年間の開発費が利益の半分を占める。資本金は4000万円。2001年9月期の予想売り上げは約2億5000万円。本社大津市。☎ 077・549・1309。